

## 高校生へ 私が選んだ 1冊の本

### 99.9%は仮説

思いこみで判断しないための考え方

竹内 薫：著  
(光文社新書)

私たちは「常識」を疑うことを好まない。みんなが信じていることをそのまま信じるほうが安心できるし、居心地がいいからだ。もしみんなが信じていることを全部疑ってかかったらきっと生きていけない。しかし、だからと言って常識や固定観念に縛られていると、偏狭なものを見方しかできなくなる。

例えば、あの有名なガリレオ・ガリレイが非難を浴びたのは、当時の人々に深く根を下ろした常識が原因だった。当時、天は神が創ったものであり、完全なものだと考えられていた。そのため、人々はそれをくつがえすようなガリレオの主張を、どんなに明らかな証拠を見せられても信じるができなかった。当時の常識に眼を曇らされていたのだ。このような例は現代においても挙げることができる。1991年に終了宣言があったアパルトヘイト政策に象徴される人種差別がその例だ。白人は有色人種よりも優れているという考え方は何の根拠もない考え方だが、それを信じる白人がいたからこそ、この政策は始まった。固定観念は私たちの自由な発想を妨げうるのだ。

また、私たちは科学という名の前に無批判になってしまう傾向がある。科学は万能、科学は間違わない、そういうイメージがあるからだろう。しかし本書では、様々な事柄から科学はすべて仮説

であり、真理に近づくことはできても、それと重なることはできないということが述べられている。「科学は反証されてこそ、科学である」というのはカール・ポパーという20世紀の科学哲学者の言葉だ。つまり、理論に反する観察結果や実験結果が出てきたときに、その理論の間違いを潔く認めることができこそ科学である。また、現在の常識では信じられないような仮説であっても、頭ごなしに否定せず、「そういうのもありうるかもしれない」と肯定的に考えること、これも科学的態度なのだ。このように、本書は科学の基本的な考え方をもとにして、私たちの思い込みや常識が「仮説」に過ぎないこと、そしてその常識がいかに脆いものかを教えてくれている。

本書が興味深いのは、こうした科学的な視点で、科学だけではなく世の中も見てみることを勧めている点だ。例えば、自分と考え方の異なる人と話をする際、相手の立場に立って考えてみるように、とよく言われるが、この「相手の立場に立って考える」とはつまり、相手は自分とは異なる仮説を信じているのだということに気づき、その仮説を理解することである。これはまさに科学的態度である。“科学的”というと普段の生活からは縁遠い話に感じるが、実はものの考え方という点で非常に役立つ考え方なのだ。

本書は理系に進もうと考えている人に読んでほしい一冊である。これからの理系の人生に必須の考え方が示されているし、最近の科学の話題を交えているので知的好奇心がくすぐられる。そして文系の人にも是非読んでほしい。常識を疑うということを身につけることで豊かな感覚を持つ人間になれるだろう。それから、「自分は常識人間だ!」と思っているあなたに、一番おすすめしたい。

(大阪府立北野高等学校3年 伊藤 頌子 河島 久美子)

通巻第60号  
2006年10月1日 印刷  
2006年10月5日 発行

©編集・発行

実教出版株式会社

代表者 島根正幸

定価 210円(本体200円)

発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5

TEL. 03-3238-7777

<http://www.jikkyo.co.jp/>